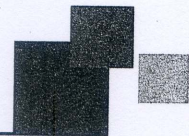


# 医療とともに



再生医療の第一人者で、この春、理化学研究所を退職しJ T生命誌研究館の顧問に就任した西川伸一さん(64)が、NPO「オール・アバウト・サイエンス・ジャパン(AASJ)」(神戸市中央区)をつくった。行政側、研究者側ではなく、患者側に立った情報発信や患者会活動の支援などを行うという。【編集委員・西村浩一、写真も】

## Interview

この人に聞く

# 患者の情報発信 後押し

J T生命誌研究館顧問

NPO「オール・アバウト・サイエンス・ジャパン」創設者

### 西川伸一さん



—AASJの構想について、もう少し詳しく話してください。

西川 これから先の50年を考えると、医療は大きな改革が必要だと思います。現在は専門家や行政が患者さんに何かを伝えるという、一方的な情報の流れ方が普通です。患者さんも、医療情報は医者や、新聞記事、テレビなどから得ることがほとんどです。

しかし、そうではなく、患者さん同士で情報を交換する、もしくは患者会などが医療情報を発信できるようにすべきではないか、と思っています。

そして私自身もこちらの側に立って、そういう患者さんの役に立ちたい。それらを表現する具体的な場がAASJ

—自身、そのような考えを持つにいたった経緯は。

西川 理研の研究者として、神戸市にも取り組んだ先端医療センターの経験が大きいですね。公費が投入されているので、研究をするだけではなくその研究が患者さんのところにとどまるように届くかが問われました。患者さんや患者団体の方たちに説明し、何かと話し合う機会が多くなりました。

2002年ごろ、米国の1型糖尿病の基金の研究部長に來てもういシンポジウムをしたことがあります。米国では患者団体が研究に何百億円も

援助している、医学の学会では患者さんがブースを設け、医者と対話しています。情報も発信しています。新薬の治療では患者団体が間に入り、スムーズにことが運んでいます。

△「対話」で得た経験

—西川さん自身は経歴からすると、行政側、研究者側の立場でした。

西川 ヒトクロロンについて政府の生命倫理専門調査会で、いろいろな人と議論した経験も大きいですね。こちらはES細胞を作りたければ、反対の人もいます。いろいろな話をして、私が思ったのは、倫理というのはどちらが正しいというより、他人がどう考えているかの感受性を持つことだということでした。

さらに、患者さんに向き合った時、政府や研究者から一方向で情報伝達をしているのでは、それ(感受性を持つこと)は難しい。

—患者にもっとも近い開業医への期待は。

西川 開業医はローカルで密度の高い情報の収集ができます。天気のことから、その地域に高血圧が多いか少ないかまで。ただ、現在の問題は自分の患者のデータしか持っていないことです。電子カルテ化すれば、エリアの医師とも患者さんとも情報が共有できます。そういう情報環境を作る中核となってほしいですね。

△神戸に拠点

—5月になって神戸・三宮に場所も確保されました。

西川 AASJには2台のコンピュータがあり、医学情報にアクセスすることが可能で、その情報の入手の仕方、背景について私が解説することもできます。

ただ、私が何かをしてあげるところではありません。患者さんが主体的に何かをする場ということです。どんどん使ってもらえればと思っています。

にしかわ・しんいち 滋賀県生まれ。京大医学部卒。ドイツ・ケルン大遺伝学研究所に留学。帰国後京大胸部疾患研究所助教授、医学研究科教授を経て、2000年から今年3月まで、理化学研究所発生・再生科学総合研究センター副センター長兼幹細胞研究グループディレクターを務めた。

特定非営利活動法人「オール・アバウト・サイエンス・ジャパン」 神戸市中央区雲井通5の3の1、サンパル7階 ☎078・241・7500

### マルホ賞に東北大・田上名誉教授 皮膚の水分、測定に貢献

臨床皮膚科学に大きな貢献をした研究者に送られる「マルホ賞」の選考委員会はこのほど、第3回の受賞者に田上八朗・東北大学名誉教授＝写真＝を決定した。横浜市で6月15日に開催される第112回日本皮膚科学会総会のスポンサーセミナーで賞の贈呈と記念講演が行われ



る。マルホ賞は2010年、皮膚科の臨床分野の発展に貢献した医師・研究者に贈られる賞として創設され、第1回は「薬剤性過敏症候群の研究」に業績のあった愛媛大学先端研究・学術推進機構学術企画室長を務める橋本公二・同大特命教授が選ばれ、第2回は手のひらや足の裏にできる皮膚がんの一種、掌せき悪性黒色腫の画期的な診断方法を開発した齋田俊

明・信州大学名誉教授に贈られている。田上名誉教授は1980年、人間の皮膚表面の水分含有状態を電気的に測定できるという報告を行い、それに基づく測定機器が世界的に普及。現在では化粧品やスキンケア製品の開発から一般の店頭での皮膚測定まで幅広く用いられ、数多くの科学的知見を生み出す機器測定法となった功績が評価された。